

対人援助学における教授作業の手段としての流暢性指導の可能性
－中学生の英熟語スキルに対する効果検討を通して－

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター
中塚 優介

対人援助学において援助者間の連携の円滑化を目指す上では、援助や援護と同様に教授についてもエビデンスに基づく手段が必要となる。流暢性指導は、スキルの保持・耐久性・応用という重要な学習結果を導く有効な指導法であることが示唆されているが、日本での実用に向けては研究が不足していることが課題となっている。そこで、本研究では中学生の英熟語スキルに対する流暢性指導の効果の検討を行った。

中学2年生2名を対象に英熟語スキルの流暢性指導と従来の正確性指導を並行して実施した結果、両指導で英熟語スキルの流暢性が向上した。そのため、本研究では指導間の効果の差を検討することはできなかった。しかし、流暢性の向上によってスキルの保持と耐久性が獲得されることが示唆された。

流暢性指導のシンプルな手続きは、多様な援助つき行動を対象にすることができる。また、追加で教授作業が必要となった場合にも柔軟に対応可能であるため、援助や援護とともに時間遅延なく教授を進められる手段といえる。スキルの保持・耐久性・応用は、新たな行動の獲得機会の増加や実際の行動場面で正の強化の保証、生活場面で必要となる複合的なスキルの獲得に役立つ。そして、教授作業の成果の指標としての流暢性は、より正確な情報移行を可能とし、援助としての役割をも担う。これらのことから、流暢性指導は対人援助学における教授作業の手段として適用可能なアプローチであると結論づけた。